

「赤い恋」以上

徳永直

一

爪先き上りの、はるか地平線に伸びた、二条の鉄軌の尖端に、黒い影がポツンと湧いた。下関発の上り列車だ。鉄軌がヂ、ヂと鳴りはじめ、鋼鉄の電気汽罐車が、またたく間に大きく、近く迫って来た。

人影の少ない富士駅で——スパイに見送られて来た二人の男がたっていた。

どっちも、色気のすつかり褪せてしまった背広を着て、よごれたヒゲ面だが、三十前後の方はずんぐりの低い背で肥り気味、四つ五つ老けて見えるも一人の方は、痩せてヒョロ高い。

列車が煽りをたてて構内に入って来た。すると痩せた方が、ヒョイと振り返って、四五間離れて見張っている鳥打帽の普通課らしい刑事に大声で云った。

「君、安心しろよ、大丈夫東京へ帰るんだから……」

それでも、スパイは無表情に、列車内に入っていった二人の男を見護っていた。三輛目の後部の硝子窓が、ヒョイと開いて、痩せた方の顔が覗いたが、チェツと舌打して、すぐ背後向きになった。

「御苦労に、まだ立ってやがる」

列車が動き出した。

二人の男は向い合って腰掛けていた。急に車窓に突っかかって来る岩壁、そしてまた急に、遠くに逃げ退ぞき拡がってゆく青い田野を、大分斜めになった夏の太陽がキラついていた。

「君、どうも失敬した。僕はナップの者と云ったのは出鱈目だ」

富士駅が見えなくなつてから、その痩せた方が云うと、ずんぐりの方も、ニヤニヤしながら、

「そうだろう、俺も、ナップの作家同盟で田村なんておぼえがないので、多分誰かが便宜上そう云ったのだろう

と、留置場で訊かれたときは、沢山いるからわからぬとこたえたがね……」

二人は薄笑いしながら、改めて名乗りあつた。

「僕は、真実ナツプの者で、鷺尾というもんです」

ずんぐりの方が、低い鼻の円い顔に笑いをうかべて先に会釈した。

「僕はS県のN地万全農連合会の者で、矢崎一郎です、よろしく……」

鷺尾は矢崎一郎という名前を知っていた。

「あ、君が矢崎君ですか……」

N市全農連の執行委員長で、鷺尾が昨夜出かけた富士村××支局で間かされた名だった。

「僕は、昨夜の演説会で引張られたんですが、君は何で……」

訊いて悪かったかなと思ひながら、鷺尾は相手のヒドク青い瘦せた顔をみると、矢崎は案外気やすく返事した。

「なアに、詰らんことで、丁度、この地方に駿遠鉄道というのが出来るので、作付の強制買収をやるんですよ、その反対運動で、××支部を廻っていたんだがね……」

とがった頬に笑いを浮べて、

「ところがいい塩梅に、ナツプの者だと出鱈目を云つたら、そのままおつてね、アハハハ」

「成程……」

「俺だとわかると、ちよつといま三四十日おさめなきアならん年貢があるので、心配したんだけど……」

轟々と列車が唸り出した。鉄橋の赤い鉄柱が、縞になつてうしろへ飛んでゆく――。

「それじゃ君は、この汽車じゃ拙いだらう?」

鷺尾は気がついて云つた。

「いや、俺は裾野で降りるんだ」

「裾野? 俺もそうですよ」

偶然だった。

「僕は、裾野で降りて、あれから山越えして岡屋敷村という支部にゆくんぞね」

矢崎は、上被のポケットから、小さい水菓の瓶をとり出しながら云つた。

「ほう? 僕は、あの共働農園にゆくんですよ、ほら、消費組合運動者の鹿本という人が経営している……」

「あ、知ってる知ってる鹿本利吉君だろう」

呑みづらそうな水菓の瓶を口にあてて、二度ばかりあ

おむくと、しずかにポケットにしまいながら、矢崎はちよつとの間眼を閉じていた。

ヒゲのまばらな、汗によこれてとがった頬骨、ヒドク憔悴した形相が、多端な農民運動の困苦を思わせる――。

「胃ですか？」

鷺尾が訊くと、矢崎は眼をつぶったまま、

「胃も腸も、どこもどこもだよ」

と薄笑いした。そして眼をあげると、今度は鷺尾に云つた。

「君も、顔色が悪いね」

「え、僕は慢性貧血でね、少し休みたいと思つて共働農園にゆく筈で東京を出て来たんですが」

「俺達も二三日ゆつくり出来るといいんだがなあ」

矢崎は心から欲しそうに云つた。

「じゃ一晩どうです、僕と一緒に農園にゆきませんか？」

「さあ？」

矢崎は、汽車の外を見た。

「出来るなら、今夜のうちに、山越ししてしまいたいが……」

窓から入る風が、いくらかヒヤついて来た。傾いた太

陽が、急速に廻転する近くの山脈を黄色く染めている。

裾野で汽車が止まった。

「富士のこつちが、愛鷹山あしたかやまだるろう？」

汽車を降りて歩きながら、すぐ頭の上に見える山々を指して、鷺尾は矢崎に訊いた。共働農園は愛鷹山の中腹に在った。

「何だか、もう暗くなりそうだなア」

次第に黝くすんで来る田圃や、影の濃くなる森などを見廻しながら鷺尾は話しかけた。

「ブーム」

身体が悪いせいか、矢崎は、次第に無口になっていた。

山を越える街道と、愛鷹山へ登る追分へ来ると、すっかり足許が暗くなった。矢崎は決心して「今夜は農園に泊めて貰おう」と云つた。

「それがいい、急ぐんでなきア……」

村もずつと外れの、ポストのある駄菓子屋の前で、矢崎は葉書を二枚買った。

「一寸待つてくれ」

軒先の薄明りで、矢崎は鉛筆をなめていた。

N市、追手町N地万全農連合会事務所内 矢崎かつ殿

と表を書いて、裏をかえすと、しばらく唇を噛んでいたが、急に一気に書いた。

俺の考えがまとまるまで、しばらく帰らぬ。子供のことなぞ、お前のいいようにやってくれ——一郎。

道向うで口笛吹いている鷺尾の後姿を、考え込んだ目付で追っていたが、またも一枚の葉書に書いた。

富士村××支部の情勢は、大体予想通り——
昨夜は××署で厄介、いまから共働農園に一泊して、
明日、岡屋敷××支部、深谷村××支部等に廻る。アト
よろしく頼む——矢崎生。

そして宛所は同じ連合会事務所で「常任委員会御中」と書いてポストに入れた。

「どうも失敬」

それから二人は爪先上りの山道を、提灯なしで登って

いった。矢崎は相変らず考え込んだ調子で、鷺尾が土地の情勢など訊いても、多く語らなかつた。

鷺尾は煙草を出して燐寸マッチをすった。ヒドイ石塊いしろの山道が、瞬間明るくなった。

「鷺尾君、君に細君があるかね」

だしぬけに、矢崎が訊いた。

「あ、ある、子供もある？」

鷺尾は相手の煙草に火をつけてやりながら答えた。

「あなたの細君……その、闘士かね？」

「いや……」

鷺尾は煙草を口から離して首を振った。

「何にもわからない奴なんだ。子供を産むことと、飯を焚くことよりしか知らねえんだ……」

「……………」

「どうもね、俺の教育が悪いせいかなサツぱりね」

鷺尾は笑いながら、

「一緒になりたては、だいぶアジってみたがね、女工出の癖に、どうも駄目なんだ、パンフレットでも読ませると、一頁が一ヶ月かかっても読めないんだからね。アハハハ」

「……………」

「で、近頃は、俺はもう嬬教育は思いとまったんですよ」

矢崎は笑いもせずに黙っていた。

「君んところは、どうですか？」

こんどは鷺尾が訊いた。

「ぼくのところは……………」

矢崎の、低いしゃがれた声が、山腹の闇の中で、いくらか沈うつにひびいた。

「すこし、闘士すぎるんだ……。闘士すぎるとは非階級的な言葉だがね」

「はあ——」

鷺尾にはわからなかった。

「しかし……そんならいいじゃないかね、俺んちの嬬なぞに少し見習わしたいなあ」

「……………」

山道は益々険しく、九十九折の岩蔭を、二人はつまずきながら登っていった。

「だが、僕は、むしろ、君の細君なぞが羨ましいよ」

しばらく間をおいてから矢崎が云った。鷺尾は訊きかえした。

「何故？」

しかし矢崎はすぐ返事しなかった。二人は変に押し黙って歩いた。

「山の神」という、うっそうとした森を抜けると、すぐ頭の上に、共働農園の灯が、チラテラと見え出した。

二一

農園につくと、園主の鹿本氏は不在だった。二人は、麦飯にソバ団子を馳定になって、それから、牛小屋を廻ったところの小屋に案内された。

「その押入れにかやと蒲団がありますから……、マツチはここへおきます」

案内してくれた農園の若い人は、ランプを持って帰ってしまった。アトは鼻をつままれてもわからぬほどの真暗だった。

「おいおい、こりや大変だな」

手探りで蒲団をならべながら、鷺尾はおどろいた。チヤチな硝子窓に、裏の杉の密林をこえて、うすい月明りがさし込んで来る。

「却って落ついていいじゃないか」

矢崎は詩人みたいなことを云った。小説かきこそすれ、鷺尾は都会労働者出身だ。電燈のないところで寝起するのは馴れてなかった。

「ブタ箱だつてアカリはあるぜ」

ぶつぶつ云いながら、鷺尾は、矢崎のとなりにもぐり込んだ。

暗闇の中で、矢崎の仰向けている水菓の瓶がひかった。ゴクリと咽喉のどを鳴らして、長いこと黙っていた。

月明りで、硝子戸にゆれる杉の密林が、夜が深くなるにつれてさわいだ。

「ヒドイ山奥だな」

鷺尾はウラ、淋しくなつて、まだ眠らないらしい矢崎に話しかけた。

「さつき君の云つた、ありや何て訳だい?」

矢崎は身じろぎもせず、返事しなかつた。眠つてる様子でもないが——鷺尾はガサゴソ腹這いになつて、枕許の煙草をさぐつた。

「ねえ鷺尾君……」

暗闇の中で、フイと矢崎しわがの囁れた声が出た。

「君は、こんな場合の夫婦喧嘩を知つてるかね?」

「どういう?」

鷺尾もそつちを向いた。

「お互いが同志であり、同時に夫婦だ。そして子供もある……」

「うむ」

「ところが、亭主は寸暇のない闘争から、クタクタになつて帰つて来る。すると嬢は、まず同志として、亭主の行動を批判する。ある場合は手ヒドイ攻撃もする……」

「だつて……君」

鷺尾が口を挟んだ。

「批判と同時に、同志として慰めもあり、激励もあるだろう」

矢崎は一寸黙つたが、身体を起して、自分も煙草をさぐつた。マッチの火が、瞬間、矢崎の頬のとがった顔を浮き出させた。

「だがね鷺尾君、君も以前は實際戦線に立つた人だから分るだろうが、運動はジグザグなものだ、お互いの見解が、チョッピリでも違つてきたまえ、それこそ……」

鷺尾は途中で何か云おうとしたが、そのまま黙つた。

「それこそ、悲惨なもんだ。良き同志ということと、仲の良い夫婦とは、必ずしも一致しないからね」

「そりゃ、そうだろう」

鷺尾はうなずいた。彼の知ってるすぐれた闘士の家庭でも、そうした葛藤はいくつもあつたから――。

「ありてい打明けるがね」

矢崎は枕で、アゴをささえながら云つた。

「実は一昨おととい日家を出るとき、夫婦喧嘩して来たんだ……。詰らん話だがね」

「ん――」

「原因は運動上の見解の相違からだがね……しかし俺は君の知る通り、病氣と疲労とで、クタクタになつてゐるんだ、外へ出ても、家へ帰つても、慰められる何者もないことは、君、樂じゃないよ」

矢崎は、レインラクのないことを云つた。

「女らしい感じも何もなくなつてゐる、しよつちゆう、眼ばかり吊上げてゐる嬢に、男としての俺が、何をなぐさめられるだろう――」

「……………」

詰らない、前衛に働く人の言葉とも思えない――しか

し鷺尾は黙つていた。理論では誰しもが短時日で飛躍できる。しかし心底の、伝統的に潜んでいる男性の、女性に対する感情――性欲の対象としての、従属物としての、女性へ対する感情――それはヒョツとこさで抜き取れるものではない――。

忙がしい闘争の戦線で、タマに落ち合う、すぐれた闘士の仲間で、きまつて始まるヒドイ猥談の中でも、性的対象としての女性へ対する感情は、封建時代のそれから一歩でも進歩したといえるか――。

勿論、それは今の段階で、日程にのぼさるべき問題ではないかも知れぬ。しかし、今の矢崎夫婦の場合は、その解決なしには、二進も三進もにっちさっちいかないのだ。

「俺の嬢は、實際めずらしい戦時的な女だ。百姓娘だけに、身体も頑固だし、変な言葉だが、インテリ出の氣むずかしい俺を、いやがつてる訳でもないんだが――」

矢崎の煙草の火が消えた。マッチを探つたがカラだった。二人は仰向けになつた。

「善悪は別として……」

鷺尾が云つた。

「男としての、君の氣持はわかるよ、その古い感情の力

スは俺も持つてる。しかし、それはブルジョア的な感情だ。それよりか……」

鷺尾は、今までの対話で感じたことを率直に云った。

「それよりか……君と細君との思想に大きな裂目があるんじゃないか——」

相手にギクンとこたえたらしかった。矢崎は黙っていた。しばらくしてから、

「俺の嬢は、妥協せんからね」

と矢崎が云った。

成程、たとえ夫婦の間でも、妥協は腐ることなのだ——

二人は永いこと眠らなかつた。しきりとざわつく杉林の風の音を聞きながら、それでも鷺尾はいつの間にか眠ってしまった。

あけがた
暁方、聞き馴れない鳥の鳴声に眼をさますと、チャンと身仕度した矢崎が、たたんだ蒲団ふとんを机代りにして手紙を書いていた。

「矢崎君、俺N連合会に遊びにいつてもいいか？」

鷺尾はおきあがるとそう云った。

「いいとも、俺紹介状を書くよ」

二人は朝飯を馳走になつて、まだすっかり太陽の出しらない山を降った。

「君、じゃ序ついででに、この手紙を女房に渡してくれんか」

「よし」

鷺尾は部厚な鉛筆書の封書を受取った。そして麓の追分道へ来ると、矢崎は山越えして岡屋敷村の所属組合へ、鷺尾は停車場のある方向へと別れた。

三

人口五万のN市は、銀行と新築のN警察署と、避暑避暑の都会の客をアテ込んだホテルだけが図抜けて目だつ町だった。別荘の多い海岸の裏通りを抜けて、町はずれの工場地帯へ出ると鷺尾は地図をたよりにうろついた。

「めんなさい」

材木工場をグルッとまわつた、日当りのよくなさそうな二階家の軒先で、「全国農民組合N地方連合会事務所」の看板をみつけると、鷺尾はホツとして声をかけた。

玄關もなにもない入口の台所らしい三畳で、四五歳位の男の児と三歳位の女の児が遊んでいた。

「かあちゃん……」

よくれた顔の男の児は、二階の方へ仰向いて怒鳴りながら、鷺尾の容子をじろじろみた。茶っぼい眼をひからせて、スパイであるかないかをみさだめるらしい様子が、鷺尾には、すぐわかった。

「かあちゃん、だれか来たよ」

鷺尾は、男の児に笑いかけながら、土間の石場に噴き出している水を汲んで呑んだ。

「どなたですか？」

二階から降りて来た三十年配の、ひつつめた髪の女が出て来た。洗いざらしのアッパッパを着た、眉毛の濃い、がっしりした体格の女だった。鷺尾は直覚的にこの人だな———と思いつながら、矢崎の紹介状を出した。

「さあ、どうぞ……」

読み終ると、すぐ二階へ案内してくれた。二間の八畳の方が事務所で、四畳半の方が、矢崎一家の住居だった。

「初めて……妾は矢崎の家内でございます」
わたし

ハキハキした言葉で云った。鷺尾も会釈した。

「さあ、そこは西日がヒドいですから、こっちへ——」

事務所の方の椅子を借りて来て、四畳半の窓ぎわに持ってきてくれた。

「氷でも御馳走したいんですが……その、目下、早魘かんぱつでしてね」

細君は快活な調子で弁解した。

「いや沢山、その代り水をも一杯吞まして下さい」

鷺尾も猿股一つになりながら、細君がコップを持って来ると、思い出して上被のポケットから、矢崎に頼まれた手紙を渡した。

「そしてね、しんばいせんようにつて、言ってみましたよ」

細君の顔色をみながら、鷺尾は云った。

「……………」

鉛筆書の手紙の封をきりかけていた細君は、茶っぼい

眼に、瞬間錯雑した表情を泛うかべて鷺尾の顔を見上げてい

たが、いくらか赭あかくなった。

「あなた、矢崎からお聞きになつて？」

こんどは、鷺尾が頭を掻いた。

「どうも、初めての方に、とんだ夫婦喧嘩なんか聞かせちゃって……」

彼女は、鷺尾の腰掛けてある椅子の傍に坐つて、手紙の封を切った。

「どうせ、やぶれかぶれだ。ここで読みますわ」

可なりヒドク痛めているらしい心を、快活さで押しかくしている恰好で、細君は手紙を読み始めた。

仕切りの草スタレの向う側で、素裸の若い常任の二三人が、テーブルの前でせつせつと何か書いている――。

「ホウ、ありや富士ですね」

窓から、つい鼻ツ先に、まだ、正午過ぎの湧き立つ白

雲を、はるかにぬきんでた富士の峰がひよいとうかんでいた。

「なるほど、これじゃ水もいいわけだ」

コップの水を啜りながら鷺尾はひとりで感心した。

「ええ、本場の三島も、すぐですしね」

細君は手紙から眼をあげずに云つた。

「はあ、三島女郎衆の化粧水のナンとか云うやつだな、そいじゃべっぴんも多いわけですな」

「ところが……」

読み終つた妻君が顔をあげて、

「妾みたいな、女もいるんですからね、アハハハ」

細君は男の様に笑つた。きこえたのか、事務所の方でも笑い声がきこえた。なるほど、細君の顔は図抜けて黒いのだ。

しかし、細君の笑いはずぐ消えた。手紙をたたみながら、

「すると、あなたも、うちと一緒に豚箱だったんですか」

鷺尾はうなずいたが、細君はたつてその手紙をタンス

の抽斗ひまだしにしまった。

「紹介しましょう」

八畳の方へ鷺尾がついてゆくと、仕事していた常任達ひまだしが椅子から離れて来た。

「こちらが、組織宣伝部の多木、こちらが教育部の工藤、あの人は××農民組合の人……」

多木という男は、ひょうかなな体躯の、高い鼻と大きな眼玉を持った若者、所属組合の人だという年配の百姓と一緒に話していた工藤という男は、ずんぐり背の坊主

頭で、ニッケル縁の眼鏡をかけていた。そしてこの常任も、二十歳そこそこの若者だった。

床の間の組合の旗の上に、一枚の半紙にかかれた人名が、飾られてあつた。右から数えて十三名。三・一五、

四・一六、六・一七と引つづきの^{弾圧}××の^{犠牲者}×××達だった。

その中に、赤い線を傍註されてあるのは獄死者の意味だった。「何処の組合も、××^{革命}的なほど、常任者は若く

るのだ」と鷺尾は思った。

「あなた昼飯は？」

細君が訊いた。鷺尾は汽車の中で喰つたといつた。

「じゃ昼寝でもして置いて下さい。妾達、ホラあそこへ来ている××農民組合で、争議が起りかけているので……」

細君は婦人部長だった。鷺尾はすすめられるままに、四畳半で横になった。そのうちに、多木も工藤も、所属組合の百姓と一緒に、身仕度して梯子段を下りてゆくのがきこえた。

「忙しいようですね」

眠れもしないので、鷺尾が声をかけると、

「ええ、手が足りないんですよ、これッぽツちの争議なんか、二つや三つ、なんでもなかつたんですけど——どんどん引っこぬかれるでしょう、だから……」

細君は、バサバサ原紙をきりながら返事した。眉根をつよくしめて、鉄筆をうごかしている彼女の、意志のつよそうな所が横顔にも現れていた。

寝返りすると、つい頭の傍の、古ぼけた小さい鏡台の上に、ハガキが載っていた。

俺は考えがまとまるまでしばらく帰らぬ。子供のことなどお前のいいようにやってくれ——一郎。

ハガキは裾野で、矢崎が出したものだつた。子供とは階下にいたあの二人の子供だろう……。

鷺尾が眼をつぶつたり、開けたりして、考えているうちに、フイと階下で、あの茶っぽい眼の男の児の声がかきこえた。

「かあちゃん、スパイが来たよ、スパイが……」

細君が、ギクツと身を起した音がした。男の児の声かまたキンキンびびいた。

細君がトントン降りていった。鷺尾も梯子段まで降りていった。

「何てたって、いないものはいないよ」

つっけんどん

突慳貪に、スパイと争っている細君の声が男のようにひびく――。

のぞくと、土間に背広の男が二人、ニヤニヤした顔でたっていた。

「可愛い亭主だろうが、隠したってわかるものはわかるんだぜ」

スパイの一人が云っている。矢崎を探しているらしかった。

「そりや亭主は可愛いよ、あんたがたの奥様と同じにね……。だって居所がわからないものは分らないわ」

細君は落ついた強い調子でネバっていた。スパイ達は到頭業を煮やして、細君を引ッ張ってゆくと云い出した。

「よし、ゆこう、一寸待つといで……」

細君は、戦術上その方がよいと考えたらしく、アッサリそう云って、鷺尾のところへひっかえして来た。

「どうせ、しょうのない年貢ですけど、いまうちは弱っ

てるでしよう、だから、一寸妾いつて来るわ、アッサリいった方が、早くかえしますからね」

細君はそう云い云い、着物を換えた。

「じゃ、すみませんが、多分一晩で帰れると思いますか……」

原紙はあがつてることや、他の常任達への言伝を、細君は口早に、鷺尾に云った。

「あ、それから子供を……。昼飯をヌキにしてあるので……」

「オーライ、大丈夫……」

鷺尾が笑ってみせた。

「じゃ、行こう！」

細君は元氣よく声をかけて、土間へ降りたつと、スパイ達に挟まれて出ていった。

馴れてるだけに、口には出さぬものの、女の児も、男の児も、鷺尾の傍で暗い顔して見送っていた。

四

翌る朝、警察から細君が帰って来たとき、夜明近く眠った常任の者も、子供と一緒に鷺尾もまだ眠っていた。

「起きなさい、大変だよ」

事務所の八畳へ上っていった細君は、テーブルの蔭に眠っている多木や工藤をたたき起した。鷺尾もその声で眼がさめた。

「何でい、うるせえ」

猿股一つの多木が傍へ寄ってゆくと、細君は警察帰りの充血した眼で読みかけていた白表紙のパンフレットを、テーブルの上たたきつけた。

「これみなさい！」

——新労農党樹立の提案——親愛なる全国の戦闘的労働者農民諸君の前に——

みんな呼吸を呑んでしまった。咄嗟とつさに言葉が出なかった。——一九二九年八月——
×××××、×××××、×××××、×××××、×××××

多木がグイとつかんで、パラパラめくった——それは正しく青天のへきれきと云った感じだった。

「どっから持って来たア？」

工藤が細君に云った。細君は階下の土間にあつたと云

った。昨夜配達されたのを気がつかなかったのだ。

多木が一枚ずつめくった。皆がそれをのぞき込んだ。三十分も、一時間も——黙って身うごきもせずに——そして読み終ると、ホツと溜たいきついて、誰も一言も吐かなかった。

細君は、さつきから眼をさまして泣いてる女の児のところへいって着物を着せながら、ボンヤリとウツロな眼をしていた。

多木が、草スタレをめぐって四畳の方へ入って来た。そして細君に低い声で云った。

「畜生！ われらの委員長は逃げるんだぞ！」

細君は、多木の眼をじっとみかえして黙っていた。多木もそれきりで室中を廻りはじめた。

工藤と鷺尾は、まだ提案書にくつついている。——

すなわち「新労農党」は——。

(一) 労働者、農民、無産市民その他一切の被圧迫民衆の利害を不断に、強力に、現実的に、効果的に、擁護伸張するために、大衆的日當闘争主義を全活動の基礎とする。

(二) かくて個々の場面に於ける闘争を、政治的要求にその必然的連関に於て結びつけ、全闘争を政治的、自由獲得闘争に集中統一して強力に展開する。

(三) 他方、かかる立場に即して、戦闘的戦線統一の決定的実現に努力する。

(四) 以上の目的遂行のために――

(イ) 完全なる党内デモクラシーの基礎の上に

(ロ) 独自の指導部を持つところの

(ハ) 恒常的政治組織を確立し

(ニ) 合法的左翼政党として、公然の舞台に於ける活動に進出する――。

「そして――親愛なる同志諸君よ――と」

重要な部分を、工藤は大声で読んだ。室の隅で、モ一度聴き耳たてた多木は、じつと足を止めた。

「おめえ、官許の左翼政党がありうると思うか？」

工藤に多木が云った。鷺尾もテーブルから顔をあげた。草スタレの間から、細君の顔ものぞいた。

「俺達は今日ただいま、政治的自由の獲得のために闘っている。そして困難な地下運動に迫込まれている――そ

れは俺達労農同盟が真実の労働者農民の味方であり、左翼であるからだ。――その現実を外にしてだ、官許の……革命……政党がありうると思うか、おめえ！」

「あらせなければならぬと云うんだらう……」

工藤はボンヤリ逃げながら笑った。

「馬鹿な！」

短気らしい多木のこめかみが、ピクリとうごいた。

「止しなさいよ多木さん」

細君が憤りつぽく怒鳴った。

「至急、中央委員会を開くべきじゃないの……」

気づいたとき、もう正午近かった。細君の男のような

頑丈な身体が、よく

忠実まめにうごいた。台所と子供のこゝと、そして婦人部と……

工藤は各組合の中央委員招集に、多木は徹夜して刷上げたビラを持って××支部へ――細君だけが本部に残った。

「矢崎に電報打つんですけれど……」

一等ビリに飯を終った鷺尾に、細君がつぶやくように云った。

「そうだ、帰って貰わなければね、まだ岡屋敷村にいる
でしょうか？」

「そうですね」

細君は、前垂掛のままツクネンと坐った。

「俺、電報打ってやるか？」

「え……」

細君は、煮えきらぬ返事して、畳の上に目を落してい
たが、ホツと嘆息ついて云った。

「妾、こんなときが一番怖いです……」

と云った。鷺尾はそれがよく判らなかつた。

「近頃は特に——右か左かというときに、矢崎と妾の意
見が対立するんですの」

骨張った大きな両掌をモミ合しながら、細君の顔は傷
ましいほど暗かつた。

「こんどの問題は殊に——ね、あなたも、この提案が撤
回されない限り、大きい分裂が予想されませんか？」

細君の態度は、鷺尾もマゴついたほどハッキリと、提
案反対の固さを示していた。

「俺達所属団体だつて無論、反対だと思つが……」

鷺尾はそう云つたが、細君の云うように、分裂は——

しかも『われらの委員長××』の信任は農民の間では厚
いだけに容易に考えられた。そして農園で、矢崎の鷺尾
に語つた言葉の端々は、この提案書支持に近いところが
多かつたのだ。

膝の上に乗つて来た女の児の頭を撫でながら、細君は
云つた。

「さつき、多木が工藤に喰つてかかろうとしたでしょう。
あれは平常から、矢崎派と云われる工藤と対立している
からですの」

鷺尾にも、それは様子で分つていた。

「母ちゃん、父ちゃん帰つて来るの？」

男の児が小耳には喜んで、そう云つた。

「そう——だけどスパイがめつけているから誰にでも喋
べるんじゃないよ」

云いきかせながら、細君は眉根をしめて立上つた。

「じゃ電報たのみますわ」

五

鷺尾が電報うつて帰つて来ると、土間に、帰つて来た

らしい多木のボロ靴と、泥まみれの地下足袋が並んでいた。

人声のする二階の四畳をのぞくと、細君が入ってもいいと云った。多木の傍にモ一人、二十四五の、長着の尻端しりはしよった百姓男が坐つて、低い声で話し合つていた。

室の隅で傍聴していると、この百姓男は、所属△△農民組合の人で、昨夜以来、自分達の組合は大変なさわざで、殆んど大勢は「われらの××」を支持することになってしましうと語っていた。

多木が、出掛けていった争議中の、××農民組合も同様の大勢だった。

「だから、俺、とりあへず取敢ず帰つて来たんだが……。下手間誤へたつくと……」

今夜の中央委員会は、一挙に提案支持に多数を占められるかも知れねえと多木は云った。準備会以来労農同盟の前衛分子の多くは、床の間の半紙に並んでいる十三名の犠牲者のように、相踵あいついで引抜かれていた。前衛がまだ地下運動に訓練されてない現在、農民大衆は、つるべうちの弾圧にしりごみしかけているところへ持つて来て――。夢のように、華やかなりし合法時代の活動舞台を

匂わすことは、意識の低い層にとつては充分に利き目のあることだ。

しかし、五十頁に亘る提案書の巧言麗句がいくらゴマかそうとしても、実践の中に身を挺ていしている前衛分子には、官許の……革命政党内で事が考えられようがなかった。

「全協の声明書は、今夜まで間に合うめえしなア？」

若い百姓男も、こんなときに、アテになる唯一の指導者は全協本部だけと信じていた。

「しうがねえ、こうしう……」

多木が顔をあげて、細君の方へ云った。

「飽迄あくまで反対でガン張つて、不利と見たら、全協と総本部の声明書が出るまで、態度未定で突つ張ろう！」

細君は、テーブルに肘ひじをついたままうなずいた。

「それに……」

多木は容赦もなく云った。

「矢崎君が帰つて来たつて、あの男は恐らく俺達の味方じゃねえぞ」

黙つて細君はうつむいていた。

工藤はまだ帰つて来なかった。しかしまだ日の明るいうち、所属組合の代表達は集つて来た。傍聴の平組合員

までが代表について来て、日が暮れた時分には、事務所に入りきれず梯子段まで溢れた。

工藤は、一番遠地の××農民組合の代表と打連れて帰つて来た。鷺尾も一応東京に帰つてみなければならなかったが、到頭、この会合の模様を見た上で、明日の一番で帰ることに決めた。

「鷺尾さん」

梯子段の方へ出て来た細君が囁いた。

「矢崎が帰つて来たら、すぐ合図してくれませんか、妾ちよつと話があるので……」

それで鷺尾は、梯子段の中段に立つて、傍聴している百姓達の頭越しに事務所を覗いていた。

議事が始まった。議長席に、何処かの組合代表らしい頭の禿げた爺さんの顔が覗けた。

「矢崎さんいねえんだな」

傍にいる百姓の一人が、ささやいていた。工藤の提案書を再説明する声がかこえた。

「否、否！」

あきらかに、自分の主観を加えて、弁護的に説明している工藤の言葉の間々に、短気な多木の声が入り混じっ

てきこえると、そのたびに、傍観者の方までザワついた。

その時、階下で靴音をききつけた鷺尾はいそいで降りてゆくと、矢崎ではなくて、昨日来た男も混じった三人連れの刑事だった。肩越しに覗くと、六七人の正服が、仰々しく、佩剣を吊上げて立っている。

「退け！ 退け！」

立塞がった鷺尾を突き飛して、正服達は泥靴のまま飛上つて来た。物音で飛下りて来た梯子段の百姓達が、刑事達を入口で塞ぎ止めた。

「かまわん検束しろ！」

肩章に金筋の入った正服が怒鳴った。畜生、解散させる気だなど思つて、鷺尾は二階へ駆け上つてゆこうとしたが、背後から足をひかれて梯子段をころげ落ちた。

議長席にいた禿げ頭のおやじや、多木や工藤も駆け下りて来た。

「無届集会と認め解散を命ずる！」

金筋が大声で怒鳴るのを背後に聞きながら、他の百姓二三人と一緒に、鷺尾も検束されて、そのまま徒歩で、N警察署へ持つてゆかれた。

地方にしてはめずらしい新築の宏大なN警察署で、保

護室に、他の百姓達三四人と一緒に待たされて、二時間ばかりたって、禿頭の議長達二三人が貰いに来て呉れた。

「チョッ、馬鹿馬鹿しい」

警察署前で、組合へ帰ってゆく人達とわかれて、鷺尾は事務所へ帰って来た。

「どうなった、あれから？」

毛布をしいている多木に訊くと、細君が眠った女の児を抱いたまま、草スタレの向うから云った。

「御苦労さま、あれから臨監つきで再開したんですけどね、臨監つきで何がしゃべれましょう。結局、明後日再開ということにして打ち切りよ」

多木は、憤おこったような顔をして、ゴロリと毛布の上に乗って寝てしまった。枕時計が一時を過ぎていた。

「ここに寝ていいかい？」

鷺尾が訊くと、多木はガクンと首だけうなずいた。

「工藤の野郎、今夜は俺が怖えから、帰って来やしねえ」

嵐が去ったアトのような事務所は、乱雑な紙片や椅子やらで散らかっていた。多木の隣りに、カヤなしで、ゴロリと仰向になると、床の間の立てかけられた組合旗の

上に、十三名の犠牲者の名前が、ジッと見成るみまるように垂れさがっていた。

「あ、矢崎君はまだ？」

フイと思ひ出して、首を捻じむけながら、また子供を抱いたまま、ジッと坐つてる細君に鷺尾が云った。

「ええ……」

細君は、さびしい微笑を浮べてうなずいた。情勢はあまりにハッキリしていた。シツカリしているとは云え、多木はまだ若かった。憤おこつてしまうと前後の戦術が感情的になった。有為な前衛達は皆獄中にあるのだ。孤塁あだなを死守して、留守師団長と渾名あだなされている妻君は考えることが多いに違ちがいなかった。

蚤かや蚊かに平気な多木は、憤おこつたままの形相ぎやうそうで、もう、いびきをたてていた。時計が二時を廻まわった。鷺尾はまだ寝返りをうつっていた。

「ねえ、鷺尾さん」

寝たかと思つていた細君が、だしぬけに声をかけた。まだ眠つた子供を抱いて坐まっているのだ。

「あなた小説なんか書く人だから、教えていた、だいたいいんですが……」

細君の声が、いつになく女らしいひびきを持っていた。鷺尾は首だけ持ち上げた。

「変な話ですが、妾にはどうしても、男の気持がわからないの……」

男というのは矢崎のことだろうが——鷺尾は細君の顔を見て黙っていた。

「あなたは何もかも知ってるでしょう。今の場合、妾はどうすればいいでしょう？」

気丈な女らしく、声の調子も落さぬが、しつかり唇を噛んでいるのが、辛らそうだった。右か、左か、浪は激しく襲って来ている。彼女がより良き同志であろうとするならば——^{いびき} 軀をたてて眠っている二人の子供は、あまりに無邪気すぎた。

鷺尾は何とも云えず、細君の顔だけ見ていた。

「矢崎はインテリ出、妾は以前紡績女工だったんですが、今でも妾は矢崎を愛して居ります」

うつむき加減になった細君の顔が、鷺尾には真正面^{まとも}に見えられなかった。開け放しのままになっていた雨戸から入って来る、だいぶん冷たくなった夜風が、草スダレをうごかした。

「男の気持がわからないって云うと……」

鷺尾は、黙っているのが苦しくて、そんなことを云った。

「早くいえば……」

細君の声が、低かった。

「矢崎は、妾に淫売婦のように白粉^{おしろい}をつけるって云うんです。何事も批判しないで、慰めてばかりくれて云うんです」

声がふるえていた。

「だって考えてみて下さい。妾達は同志なんです。白粉つけて淫売婦の真似したり、そして、スパイと取っ組んだり、妾には両方できません」

煙草の火が指先で焼きついた。鷺尾は慌てて枕許の椅子の足で、もみ消した。

「矢崎の、そうした気持が、単に矢崎だけでないことは、妾も三十になりますからわからぬことは、ありません。

病軀をひきずって、とにかく、駆け廻ってるのを、真ッ向から批判し、鞭うつつことは妾にだって辛いですわ。だけれど、妾達は前衛です、大衆の先頭にたっているんです。批判の鞭なしに、白粉でもつけていたら、それこそ腐る

だけなんですわ……」

めざまし時計が三時を廻った。多木が大きく寝返りうつと、グツと、鷺尾のところまで腕を伸してきた。

旧い伝統の、感情のカスを背負わされて、先頭をすすんでいるものの悩み——鷺尾は、いつか読んだロシアの小説「赤い恋」を思い出した。しかし、あの女主人公の環境は、革命後の夜会であった。彼女の子供の哺育も、彼女自身の経済的環境も、また正しいと認めてくれ、励ましてくれる者も多数にあつたのだ——。

避けることの出来ない悲劇——鷺尾はボンヤリ頬づえついたままで云った。

「理クツで云えば、カンタンですが……」

細君の顔がギョツと振り向いた。

「ああ、矢張り……ね……」

笑っているような、泣いているような顔で、細君は呟いた。

「……………」

鷺尾が何か云おうとすると、細君はささぎるのように、女の児をシツカリ抱いたまま、顔を反向けた。

「それならわかっていきます……わかっていきます……」

矢張りそれより外に道はないのだ……と云うように、大きく肩で息をしながら、子供の頭の上にアゴをうずめながら云った。

「わかっています。今のは……妾の愚痴でしたわ……」

六

その暁方一番の汽車で、鷺尾は東京へ発った。まんじりともしなかつたらしい腫れぼたたい眼をして、細君は子供を負つて見送つて来てくれた。

「小石川の杉さんよろしく……」

と言伝した。杉とは、N連合会がまだ草分当時、評議会から送られたオルガナイザーで古い闘士だった。現在は鷺尾の住所近くで小さい製本屋をやっているが、N連合会にとっては忘れられぬ人であった。

すすむ者、しりぞく者、斃れる者——しだいに激成される嵐を突き切つて——汽車は疾走した。

東京ではそれ以上の混乱があつた。左翼的な労働組合では激論に徹宵して^{てしやう}いた。大阪地方、九州連合、全農系で××地方、××地方等は、大勢が「新労農党樹立」に

決定したという情報が入っていた。

しかし、逸早く出された×××新聞号外は、××氏(特に氏が使つてあつた)一派の提案撤回を迫つていた。つづいて全国労働組合協議会の機関紙は「新党樹立反対」を声明した。そして×××新聞の再度の号外は、ハッキリと、×××一派を社会民主主義者と刻印うつて正面から反対した。

鷺尾が東京に帰つた日、すぐナツプの書記局へゆくと、今終つたばかりの委員会は、新党樹立反対の声明書を出すことに決定したところだった。

「新党農党樹立の提案書」が出されて混乱三日——四日目には、完全に真実の左翼が正しい理論方向を指示したのだった。

書記局から帰る足で、鷺尾は杉の家へ寄つた。

「やア、大変だね」

小僧と女房を相手に仕事をしていた色の黒い烏帽子頭のおやじが、眼をキョロキョロさして出て来た。

「まア、此処へでも坐れ」

製本の裁ちクズで、足の踏場のないところへ、莫慮ぶとんを投げ出してくれた。

「俺アいま現役でねえから、大きなこと云えんが、しかし××は矢張りインテリだな」

杉はひとりで喋べつた。

「だが、丁度、ここんどこで怖気だつてる輩が多いし、何処も此処も分裂さわぎが多いらしいぜ」

百姓のような鈍豆煙管を、セト火鉢でカンカンはたきながら、

「下関の××労働組合じゃおめえ、幹部連中訳がわからなくなつてしまつて、おしまいにやとうとう、鉛筆をテ—ブルにおつたつて、その倒れた方へ決めたと云うぜ」

「ま、まさか……」

二人で失望したが、そんな茶話もある程の混乱は、容易に想像つくことだった。

「あ、それから、さつきS労働の者が来て云つてたが、静岡全農は全県一致だつてな」

「全県一致つてどちらへ？」

「提案賛成へよ！」

「バカ云え、俺いま××のN連合から帰つて来たばかりだ」

「ほう、N連合は反対か？」

「いや、まだ未定だ」

N連合会に詳しい杉に、鷺尾は情勢を語った。そして矢崎の細君の言伝も云った。

「ブーム、あの細君ならガンばるだろう、しかし、中心分子のいいところはすっかりぬかれてしまってるし、ガンばり切れるかな？」

杉は烏帽子頭を傾けていた。鷺尾は杉に、矢崎夫婦の葛藤のことを話そうかと思ったが、そのまま帰った。

一週間ばかり経って、鷺尾のところへ、細君から手紙が来た。

先日は失礼いたしました。

あれから、矢崎は帰って参りませんので、心配していましたら、N刑務所にいることがわかりました。

スパイの話で察すると、あなたが打って下さった電報で、慌しく帰って来るところを運悪くN市の大手前で、N警察の署長を乗せたサイドカーに打つかつて、負傷したんだそうです。それで、担ぎこまれた病院で手当がすむと、そのまま刑務所入りとなったらしいんです。

負傷は、後頭部と、右の膝頭の擦過傷すりきずで大したことはありませんが、妾はガツカリいたしました。

強制処分を受けた理由は、この二月の××紡績工場の争議に応援して、器物破壊で、五十円の罰金刑だったのを、納入出来ないで捕まったんです。

こちらの情勢は、あまりよくありません。S連合会は既に賛成と態度を決しましたし、それに御存じの工藤等は、多木に殴られて以来、本部にも寄りつかないで、各組合を駆け廻って策動しているらしいです。

しかしわれわれの方も、少数ながら結束してガン張っています。N連合会としては未だに態度未決定です。

たとえ、矢崎は新党に去っても、妾達は飽迄、全協の声明を支持して闘うつもりです——。

九月九日 矢崎 かつ

八月から一カ月間、対立抗争と、分裂をまき起しつつ、^{大山}××一派の社会民主主義は、益々はつきりして来た。分裂しふるい落されつつ、糾合された全国の新党樹立支持団体は、支配階級の希望通りに、共産党の臭味を、スツカリなくしたものだつた。

九月の末になって、N連合会も終つひに、大勢は賛成に決したと云うことだった。

「細君のガン張りもダメだったかな」

鷺尾は細君のあの意志の強そうな顔を思い出して、首を振ったのだった。

その或る夕方、杉がヒョッコリ鷺尾の家へやって来た。

「おい、矢崎夫婦が上京して来たぜ——」

鷺尾はおどろいて、杉の烏帽子頭を見た。

「ほう、どうして？」

杉は坐りもしないでセカセカ云った。

「細君が、新党結党準備会上京する矢崎を無理に引張つて来たらしいんだ」

「……………」

「そして、細君一人では理論で闘争しきれないから、比つちの全協の現役と一緒に討論会を開いて貰いたいと云うんだ。だから、俺、これから出掛けて、S労働と、金属労働の誰かを引張つて来ようと思ってる……」

「なるほど……」

悲劇の最後が近づいたのだ！ 細君はまだガン張っているのだ！ 鷺尾は立上りながら、杉の後からついて出

た。

「俺もいつてみる……」

七

「今晚は」

杉の家へゆくと、杉の女房が、ピケ代りに家の表に立っていた。X党の者が来るのだなと思いつながら、工場兼住居の六畳に入つてゆくと、矢崎夫婦が、硬こわばった顔付で、坐っていた。男の児を矢崎が抱いて、女の児を細君が……。

「あ——」

眼で会釈だけして、鷺尾は杉のとなりに坐った。白緋へこおびに兵児帯をキチンとしたニキビづらと、工場のヒケから立寄つたらしい弁当箱を持った労働服のどっちも若い男が二人、矢崎夫婦と向い会つて坐っていた。S労働の者だった。

「金属から一人来るんだ」

杉が鷺尾にささやいた。室ん中は息苦しかった。

女の児は眠っていたが、男の児は、茶っぼい眼を、キ

ヨロキヨロして、緊張した空気におびえてるようだった。二ヶ月振りで見ると矢崎の顔は、相変らずこけた頬に微笑を泛べてはいるが、何となく、裁^さばかりる者と云った捨鉢の弱さが見えた。

細君は、一言も発せず、畳の目ばかりみつめて、キツと締めた口許に「決心」が充分見えていた。

入口で、板裏草履の音がした。

「遅刻しました」

青い顔に、ヒゲのマバラな「中川材木店」と襟印の入った袴纏^{はんでん}着の中年男が入って来た——。

「あ——」

室じゅうが眼だけで会釈した。杉が、その袴纏のそばへ寄っていつて、低声で、しばらくささやいた。

「わかりました」

「中川材木店」は案外、大きなのんびりした声でうなずいた。

杉が、及び腰でお茶を配り、顔^づれは、一応そろったが、論点は何処におくか——一寸誰も黙っていた。

「日常闘争を強化する上に、労農同盟は、可能か不可能か——、これからどうだろう?」

鷲尾が、矢崎夫婦の顔を見ながら云った。矢崎は汽車の中で、また農園での彼との話の中で、一等これに重心を置いていたことを知ってたし「新党支持者」の趣旨も多く其処にあったから——。

矢崎も、細君もうなずいた。

「労農同盟は——ではなくて、^{党組織再建} ×××××はだね」

「中川材木店」が訂正した。S 労働の二人が「そうだとつよくうなずいた。矢崎はハツとしたように、そつちを見た。

「われわれは第一に、準備会以来の、組織における大きな過誤を、此際率直に認めてかからねばならぬ。第二に、^党×それ自身が未だ若く、地下運動における大衆化も、極く芽をふきかけている位の、弱小な現在であることも認めなくてはならない。しかし、それが故に……」

矢崎が、フイと顔をあげた。

「しかし、實際を——俺達の場合を考えてみてくれ——」

^{しき} 唖れた声だが、千軍を往来して来た矢崎の言葉にも力がこもっていた。「中川材木店」は、おとなしく、相手の言うことを聴いた。

「中心の前衛は、現在殆んど引抜れてしまったと言って

矢崎が反問した。

「そうだ！」

「中川材木店」は、つよく言いきった。

「従来、プロレタリアの党は一つしかなかったように、将来だって、党は一つしかあり得ないんだ！」

「しかし、しかし……」

狼狽にちかい声で、矢崎が手を振った。

「現実を、どうする。S 地方連合会も賛成、俺達の連合会も、圧倒的に新党支持なんだ。机上の理クツはそれですむかも知れねえが、現実……」

「現実がそうなんだ」

工場帰りの労働服が憤りつぽく怒鳴った。

「なに？」

若僧に怒鳴られたのがグツと来たらしく、矢崎は気色けしきバンで睨み返した。

「まあ待て——」

「中川材木店」が抑えた。

「君の『現実論』はわかる。しかし、それは過渡期の、党×が弱い現在だからだ。俺達はこの苦境を切抜けねばならん。たたきのめされても、何でもかでもこの時機を切抜

けねばならないんだ。そのときに当って、全線への総退却をたくらむ者こそ、憎むべき裏切者だ！」

矢崎のどがった頬に、かすかにのぼった血の気が、しだいに褪せて云ったが——言葉はやはり突っ張っていた。

「裏切者？」

片膝たてたまま、故意に喧嘩を買ってゐる態度が、鷲尾にもわかった。

「そうだ……」

諦めをつけたように「中川材木店」は、微笑を含んで云った。

「フン、何を云ってやがる。空論は君等ウルトラに任しとこうよ。俺ア結党式の準備が忙しいから失礼する——」

手荒く男の児を、膝から押し飛ばして、矢崎は立上った。細君が咽喉にかすれた声で云った。

「あんた、それでいいの……」

矢崎が、鷲尾の背後で立ったまま、白っぽくれた調子で立止った。

「なにが？」

細君の口許がガクガクふるえた。

「増×さんはじめ、十三人の犠牲者に恥しくないの……」

「……………」

無言で、フィと背を見せて出てゆく矢崎へ、泣き出した男の児を抱き寄せながら細君は叫んだ。

「卑、卑怯者！」

眼頭に涙をうかべて、齒と齒との間から押し出すように叫んだ――。

八

結党式準備が済んで、翌る日、矢崎は、細君と全然別に、帰ってしまった。

二人の子供は、鷺尾の家で寝起した。細君は、翌る日から杉の家へも居なかつた。何処にいってるか鷺尾にもわからなかつたが、訊ねなかつた。

子供達は、鷺尾の子供と一緒に遊んでハネ廻っていた。小さい女の児が「かあちゃんは？」とタマにたずねると、男の児が、すぐ茶っぽい眼を光らせて答えた。

「豚箱だい……」

子供達は馴れていた。夜は、鷺尾達夫婦の間に挟つて、四つの男の児に、三つの女の児が、おとなしく抱かれて

寝た。

「××^{革命}ごっこしようや……」

そんなことしらない鷺尾の子供を仲間に入れて、男の児も、女の児も、腕を組んだり、突き飛ばしたり、殴り合つたりした。鷺尾の五つの男の児は、ポカンとしていた。

「おめえ、××^{スパイ}××になんなよ、肥ってるから……いいかい」

鷺尾夫婦は、傍で思わず失笑したりした。スパイにされた鷺尾の子は、殴られて泣いてばかりいた。

気丈なところは細君に似てるが、脾弱^{ひよわ}そうな身体つきなど、男の児は、そっくり矢崎だった。

一週間ばかりたつてから、男の児は、飯を食わなくなつた。医者に見せると腸カタルだと云つた。

二三日経つたが、熱が下らなかつた。鷺尾は心配して杉のところへいった。

「細君に知らせた方がいいと思うが……」

杉は黙つてうなずいた。

その晩おそく、ヒョッコリ細君が、鷺尾のところへやつて来た。

「かあちゃん」

女の児が飛びついていった。

「どれ、どれ……」

ひょうのう

氷嚢をあてている男の児の前額を撫でながら、細君はのぞき込んだ。

「ほんほんいたいかい？」

男の児は、せつなそうに、茶っぼい眼でうなずいて見せた。鷺尾の妻が傍から経過を話した。

「どうも、いろいろとお世話かけてすみません」

細君は、女同志らしく会釈してから自分で手当をやったりした。

「もう峠を越したと医者には云ってましたよ」

鷺尾は眠ってる自分の子供を抱きながら云った。

「どうもお世話さま、そうですか……妾も、この児を死なしたかありません」

細君はそんなこと云った。鷺尾の妻がソバヤへ出てゆくと、鷺尾と向いあつて細君は坐った。ゲツソリ痩せが見えるが、物腰にも、何んとなく、苦悩が通り過ぎたよ
うな一抹の明るさがみえた。

「この男の児は、どうせ、田舎へやっちまうんですけれど

も……」

ウトウトしていた男の児の方へアゴでしゃくつて、細君は、ひとごと他人事のように云った。

「ほう……」

鷺尾は、細君の尖とがった肩骨のあたりを見ながらたずねた。

「これから、どうしますか？」

訊いて悪かったかと思つたが、細君は案外明るく振り向いて云った。

「矢張りN連合会へ帰りますの」

「……」

「あそこは妾の職場ですからね、民主々義者にさらわれた大衆を取り戻さなければなりません」

そう云つて笑つた。すると矢崎との関係はどうなるだろうと、鷺尾は思つた。細君はそれを察したらしく、あつさり説明した。

「矢崎はもう同志じゃありません。妾もやつと夫婦という間違つた封建制度の奴隷関係を清算しましたわ……」

「なるほど」

鷺尾は細君の黒い顔をじつと見た。——百万べんの理

クツが何になろう。此の人は、此の人の退つべきならぬ
現実が、此の人を飛躍させたのだ――。

「もつとも……」

細君はいくらか云いにくそうに――。

「都合では、矢崎と、また同棲するかも知れません。し
かし、それ以上のものではありません」

「なるほど」

鷺尾はそれ以上訊ねなかった。

四五日経つと、男の児も、おおかた恢復した。一応N
連合会へかえるという細君を、男の児を杉が負つてやっ
て、鷺尾も一緒に東京駅まで送つていった。

「じゃ、元氣よく……」

杉と鷺尾が、代る代る握手した。

「ええ、ウンと働きますわ――」

三等車の窓で、細君は明るい顔して云つた。汽車が動
き出した。

×分派として、来たときはすっかり違つた、重要な
党フラクション
使命を負つて、細君は彼女の云う「職場」へ帰つていっ
た。

二〇一三年二月七日 初稿 公開
二〇一六年二月二日 第二稿 公開

【解題】

〈初出〉『新潮』第二十八年第一号（一九三一年一月号）

※ 攔筆は「一九三〇・一一・一〇」。「作者附記」として「これは内容通り、昨年のことだ、労×党が大衆から湧き起つた解消運動のために、足をさらはれつゝあるのを思ひ合せるとき、読者諸賢にも想像がつくであらう。」とある。

〈単行本〉『赤い恋以上』（内外社、一九三二年六月）

※ 「序」に『「赤い恋」以上』の主人公は、一女労働者だ。そして前衛だ。この前提条件の下にこそ新らしき恋愛『性道徳』の指標が示さるゝのだ。それ以外の何の階級にも、それは決してあり得ないのだ。／誤られたるブルジョア自由主義の淫売恋愛、若くばインテリの滓の中に勝手に歪曲されたゲンヤイズム——そうしたものにこの『「赤い恋」以上』の、女主人公は、明瞭に新興階級の正当なる性道徳を示すであらう。／一切が闘争の中から——実践こそが理論をつくる。この正しき『性道徳』も其処から生れ出たのだ。」とある。

『戦列への道』（改世社、一九三二年九月）

〈選集等〉『明治大正文学全集・第五一卷』（春陽堂、一九三二年七月）

『日本プロレタリア文学集 24・徳永直集(1)』（新日本出版社、一九八七年一月）

※ 本稿では『戦列への道』を底本とし、各版を参照して校訂した。なお、各版で振られているルビ以外に、難読と思われる漢字には新しくルビを追加した。また、伏字については、『日本プロレタリア文学集 24・徳永直集(1)』を参照し、同書で起こされていない伏字については、校訂者が新しく復元した。